

## 岡倉覚三のアジア愛

—あるいは、なぜ岡倉は Asia is one. をその後言わなくなったのか—

なにかの出来事を「歴史」のひとつまとして語ろうとするとき、それを実証するために、その出来事を目撃した人、経験した人の証言を引用する。当の本人はなにも言っていないとしても、その出来事、それに関わった人物の身近にいた人の証言は身近な存在であったというだけで信用度が高くなる。それが、その出来事から遥かのち、何十年も経ってからの回想であっても、その証言者が身近な人だったという理由だけで、信用され引用され、「事実」として流布される。

たとえば「ゴッホの自殺」という出来事もその一つ。ゴッホ (1853~90) が亡くなる一ヶ月前に彼の絵のモデルになった下宿先の家主の娘さんが、すっかりお年を召した事件の五十年後に語った顛末が、「ゴッホの自殺」の最も信頼できる証言として、その後 (1950 年以降) の「ゴッホの自殺」を語り考えようとする人の「裏付け史料」となって引用されていったのも、その好い例だと言えるでしょう。年老いた「娘」さんの回想、しかも彼女自身はそのときまったく関与していなくて、彼女の父親が処理したのですが、その父親から聞いたという話を、断片的に思い出したにすぎない。身近で動いていた父親への配慮は証言の「事実」性をどのくらい歪めているか。だいたい五十年もなぜ黙っていたのか。そもそも身内の証言ほど当てにならないものはないのではないか。まず、自分を守るところから語り出すのは避けられないからです。

そんな問題は顧慮しないで、これはゴッホのモデルになった人物の記憶なのだ、その証言を信じ込み、一人のゴッホを慕う旅人 (斎藤茂吉のことである) が、ゴッホが亡くなって二十年後 (それでもすでに二十年経っています、しかし五十年後よりははるかに近い)、旧下宿を訪ねて、そこで食堂を営んでいるお女将さんから聞き取った話のほうは、おそらく東洋人の通りすがりの芸術愛好家がたまたま拾ったエピソードぐらいの価値しか与えず、ずっと無視されて来ています。茂吉の記した「下宿」の様子と、旧家主の娘さんの遠い日の出来事の回想との違いになぜ疑問をもたないのでしょうか—彼女は、そのころ何回かインタビューを受け、そのつど、内容が微妙に違ってさえしているのです！せめて、「身近な人の語る証言」に混じる恣意性を別の報告と比較して考え直してみるくらいのことをしてもいいのではないか。

「事実」の虚構化、とでも言えばいいか。こういう現象はいたるところで起こっています。

岡倉覚三 (1863~1913) の場合にも、それが観察出来ます。

(以下の☆の部分は、読み飛ばしてもらっても構いません。)

☆

岡倉の場合、まず彼が亡くなってから「天心」先生と呼ばれるようになり、日本という国が急速に軍国主義の支配下に動かされるようになった状況のなかで、『東洋の理想』と訳された英文

著作 The Ideals of the East の冒頭の一句「Asia is one.」が、大東亜共栄圏拡大を狙うスローガンとしてぴったりと注目され、いつのまにか Asia is one. が Asia is One. と書き換えられ（この書き換えの罪はその後の大本営発表と同じくらい大きい!）、「大東亜共栄圏を予告した偉大な先覚者岡倉天心」がもてはやされ崇められる時代が始まりました。そして、多くの「天心伝」「天心論」が書かれていきます。インドで書きつけた反故のようなノートまで遺品のなかから見つけ出し「著書」として扱い（これはあきらかな捏造でっち上げである）、「英文四部作」と呼ばれるようになりました。

じつは、岡倉の伝記は、そういう状況のなかで書かれ始めました。賛仰を高揚させるために伝記が必要だったからです。この時代に書かれた岡倉の伝記はすべて、執筆動機の出発点に「先覚者岡倉天心」の実像を描こうという歪んだ先入意識が据えられています。「実像」として書かれたものはぜんぶ「虚像」だったということを、現代のわれわれは、冷静に読み直す必要があります。

その時期に、岡倉の息子や実弟も、この大東亜先覚者「天心」の回想録をつぎつぎと書いていきます。英文著書の翻訳もこの時期弟由三郎の教え子たちによって行われ始めました。息子は『岡倉天心全集』の発行を企てたりもしています。自分の父親のことを「父天心」と呼んでいること自体、虚構の壁土が匂ってきますが、人間というのは哀しくも愚かな存在なのですね、ああいう異常に高揚した状況のなかで、父親が神様のように崇められてしまうと、その誇らしい思いに乗じた発言をしてしまうのでしょうか。

1941年12月8日の出来事は、「一億の日本人」をやはり異常としか言いようのない昂りに舞い上がらせ、人びとは、この日から新しい日本の建設が始まるのだと、心の底から湧き返る気持ちに浸りました。高村光太郎や北原白秋、室生犀星といった詩人たちもあたかも自分が桂冠詩人であるかのような思いに溢れた戦争賛美の詩を書いたのです。（こんなことを書いているボク自身も、あの状況にいたら同じように高揚してお国にいのちを捧げよう、などと口走っていたかもしれない。そういう自戒を忘れてはいけないと思う。と同時に）そんなふうに分身を見失って父親や師匠を讃仰した仕事に対して、いまなら、冷静に扱うことが出来るということも忘れてはいけないと思います。『父天心』に書かれていることを無条件で実の息子さんの回想証言だから間違いない「事実」として引用している「岡倉」論は信用することが出来ません。

なぜ、あんなふうには賛美崇拜されることになってしまったのか、書かれているどこに、盲目的な賛仰で歪められた記述があるか、つねに気を配って扱わねばならないと思います。

岡倉の一番弟子を自認していた横山大観も、息子に負けない高揚ぶりで、五浦の旧邸に「亜細亜ハーナリ」と揮毫して、大きな碑を建てました。岡倉は英文で Asia is one. といちどだけ書きましたが、日本語で「アジアは一つ」（「ヤ」に注意、朝日新聞社が出した『国民座右銘 一日一言』では浅野晃がこう引用しています）とか、「亜細亜ハーナリ」とかを書いたりはしていません。

あんなに身近にいて、それこそ息子より岡倉覚三の芸術観や世界観を多く聴く機会のあつたはずの横山大観なのに、あんなふうに分身を忘れて「大東亜共栄圏の予言者天心先生」を讃えるこ

とになってしまったのは、なぜだろうか。そして、日本帝国の無残な敗戦を知り箱根の別荘に引き籠った大観は、訪ねてきた内務省情報局の元士官に「自分はどんな戦犯の裁きを受けるのだろう」と慄きながら語った日があったことを忘れ、戦後三年も経たないうちに「再興日本美術院」の重鎮として、文化勲章ももらい、日本画界に君臨していきます。その彼の振舞いや「天心」先生の回想に、戦時下の自分の発言と行動に対する反省はどこにも読み取れません。隠し切れると思っていたのか。戦時下の自分の行動は間違っていなかったと思っているのか。しかし、間違っていなかったと明言している発言録も手記も遺っていませんから、やはり、隠し果せたらそれでいいと思っていたとしか考えられない。戦中の自分を包み隠して、堂々と権威の座に坐っていたのは、どうしてなのだろうか。

こういう現象は、画家大観だけに見られることではありません。さきほどの詩人の例を思い出せば、北原白秋は敗戦の詔を聞く前に死んでしまったのですが、死の直前出版された白秋の作品集には「戦争賛美」の詩や歌がたくさん収められていました。それが、白秋を追悼する意図からでしょう、戦後すぐに白秋の弟子たちによって再刊されます。その再刊本は、戦中に出版された同書名の本の半分くらいのページ数の薄い本になっていました。いうまでもありません、弟子たちが「戦争賛美」の作品は省いて出版しようとしたからです。室生犀星は、戦後何年か経ってからですが、『室生犀星全詩集』を生前に出版しています。つまり自分で全詩集を監修したのですが、そこでは、戦時下にした『美以久佐』一冊はすっぱり抜け落としています。

こんなふうには戦中の出来事、自分の振舞いを見事に消し去って戦後を堂々と権威者として生きていくことが出来たのには、どんなからくりがあったのでしょうか。岡倉は生前に公の場では「天心」を名乗っていません。私的な場面や揮毫の署名に使っていたくらいなのですが、亡くなったとき、戒名に「釈天心」と付けられます。それを大観始め弟子たちが尊重したのでしょうか、「天心」は岡倉の没後の運命の代名詞になっていきました。戦中「天心」の名が賛美されたのは「Asia is one.」の一句のせいであることは、明らかですが、敗戦後、なぜ戦中の「創作」が批判克服されなかったのでしょうか。戦中に書かれた「天心論」「天心伝」はすべて大東亜共栄圏の予言者「天心」を賛仰する意図を下地に書かれているのは当然として、戦後になってもそれをきちんと整理しないで引き継いで文献にされているのはなぜでしょうか。

そのことに気づいて、ボクは、戦中の「天心伝」や「天心論」は、その虚構性に注意を払って読むことを心がけ、岡倉が生前書き遺したものを丹念に読み込むことから「岡倉覚三」という人物とその思想を解説していこうとしてきました。その最初の成果がミネルヴァ書房から出した『岡倉天心』でした。

その本も、もう十五年も前の仕事で、それから、折りあるごとに、岡倉のことを考え書いたり語ったりしてきて、先週横浜市の岡倉天心市民研究会に招かれ、『日本の覚醒』はどうのようにして書かれたか」という論題を頂戴して話す機会をもらいました。そして、あらためて『The Awakening of Japan』を読み返し、いくつか大きな決定的な確認が取れました。それを、今日は報告したいのです。

長い前置きになりました。

## ☆

結論をさきに列挙しておきます。

- ① これは、これまでなんとなく言ってきたことですが、「Asia is one.」と岡倉は『東洋の理想』で書いたけれど、それ以後亡くなるまで、再びこの一句は口にすることも文字として書きつけることもしなかった、その理由。それが読み取れたこと。
- ② 岡倉覚三は、これまで考えられてきた以上に徹底した「平和」を愛する人間であったこと。「詩と平和」—これが岡倉の掲げる旗であること。
- ③ 日本（明治日本）のあるべき姿の根拠を、岡倉は「五箇条の御誓文」に見ていること。
- ④ 岡倉にとっての「天皇」は英文著書で頻発するMIKADOであり、そのMIKADOの原像は古代中国の伝わる「三皇五帝」（とくに堯帝、舜帝、さらに言えば黄帝）にあるということ。
- ⑤ 岡倉はナショナリストでもアジア主義者でもないということ。②の理由から、当時の明治為政者が唱えていた「富国強兵」を明治の目標としてまったく認めない。③④の理由から、アジアの国々に覇権を持たせるような政策構想にはまったく組みしない。⑦に誌すように、彼が本当に仕上げたかった仕事は「日本美術史—アジアのなかの日本美術の歴史」を書くことだったが、その歴史記述の方法はヘーゲル学派歴史観に基づいていること。ヨーロッパの学問はかなり深く勉強している岡倉である。
- ⑥ ヨーロッパがアジア諸国に対して見せる侵略的物質繁栄追求の「近代」を非難するが、「人類愛」の実現を目指す「近代」は、彼の求める「近代＝現代＝時代理想」だったこと。
- ⑦ ①～⑥の理由により、アジアに対しては、古代アジアに理想をもった新しい平和なアジア各民族の独立した営みを夢見ており、岡倉が大切にしていたのは「人類愛」を基調にした「アジア愛」ということにほかならない。
- ⑧ ①～⑦の理由から、彼は、古代アジアの遺産を活かして発露してきた形としてとらえる日本の美術（絵画や詩）の歴史を完成させれば、そのとき真の意味の「美」の姿、「美・芸術」のありようが明らかに出来、「人類愛」に満ちた世界を手にすることへ人類を導き、日本でそれが実現できればヨーロッパにも実現できる、と信じていた。その意味では、日本は世界のリーダーになれると思っていたこと。
- ⑨ 以上のような岡倉の姿勢から、岡倉覚三は、「日本」や「アジア」に固執する偏狭なナショナリストではなく、「人類愛」という普遍思想をバックにした「アジア愛」の観点から「世界」を見ようとし（この姿勢自体この時代には極めて稀）、それに貢献する「美術史を書く」というよ

り「美術史を生きよう」とした、既存の思想家活動家の概念のどれにも当てはまらない、当時の明治日本にあってまったく孤立した思想家だったと言える。

これらの問題を、以下に少し詳しく確かめていきたいと思います。(今日は原稿はここまでです。)